



第五回盛岡国際俳句大会

令和五年十一月十二日(日)

盛岡劇場

入選作品集



盛岡国際俳句大会とは

日本文化を象徴する芸術である俳句は、今では「HAIKU」と呼ばれ、世界各地で親しまれていることをご存知ですか。

盛岡国際俳句大会は二〇一九年の盛岡市市制施行一三〇周年を記念して始まった日本語と英語による俳句の大会です。

盛岡市は山に囲まれた風情ある街並みの中を、鮭が上る川が流れる、自然豊かで四季の彩りを感じられる街です。また、多くの偉大な先人を輩出した歴史と文化が薫る街でもあります。

そして俳句は、そうした自然や歴史を切り取り、五七五のたった十七文字で表現する最も身近な芸術なのです。

盛岡に住む人が、自分の街を見つめ直し、その魅力を再発見したり、盛岡を訪れた人が、その魅力を知り、好きになってくれたり。

この大会がそんなきっかけになってくれれば幸いです。

盛岡国際俳句大会実行委員会



ごあいさつ

盛岡国際俳句大会実行委員会

会長 内館茂

本市は、四季の移ろいを身近に感じられるまちであり、また、俳人である山口青邨をはじめ、石川啄木や新渡戸稲造など、文学に造詣の深い先人が残した歴史文化が息づくまちであります。

盛岡国際俳句大会は、俳句を通して盛岡の魅力を再発見し、国内外に発信することを目指して二〇一九年から始まった日本語と英語による俳句の大会です。第五回となる今大会は、前回大会を上回る、大変多くの方々から投句をいただいたところ です。

これもひとえに、盛岡を、そして俳句を愛する皆様の想いと、選者の先生方をはじめとする大会関係者各位の御指導・御協力の賜物であり、皆様の御尽力に深く感謝を申し上げます。

この大会を機に、盛岡市民の皆様には、自分の住むまちに誇りを持ち愛着を深めていただき、国内外の皆様には、盛岡の魅力をより一層知っていただく機会となりますよう御期待申し上げます。さらには、俳句をきっかけに、多くの皆様に、盛岡のまちの魅力に心惹かれ、共感する盛岡ファンになっていただければ幸いに存じます。

結びに、投句いただいた皆様をはじめ、関係各位の今後ますますの御発展を祈念いたしまして、挨拶いたします。

【日本語部門】

◇大会賞

自由題 夏井いつき 選

聞き慣れぬ囀り旅の終りかな 盛岡市 内藤麻子

【講評】異国を歩き味わい楽しんだ旅の終わりか。ふと「聞き慣れぬ囀り」に気づく。続けていたい旅への感慨に、日常へ戻る安堵が混じる。

盛岡題 白濱一羊 選

チャグチャグ馬こ果てて馬の香残る街 奥州市 伊藤さとる

【講評】祭が終わわり、馬も見物客もいなくなった街。そこに残された「馬の香」とは、祭の余韻みたいなものを含んでいるのだろう。

ジュニアの部 白濱一羊 選

夏の空最後の円陣組んでおり 岩手町 水賀美尚子

【講評】中学か高校の部活動だろう。三年生にとっては、勝っても負けても最後の試合。円陣を組んでの気合にも力がこもる。

【日本語部門】

◇大会特別賞

盛岡市長賞 名久井清流 選

はいどんどんわんこ蕎麦屋の夏旺ん 盛岡市 工藤幸子

【講評】「はいどんどん」給仕さんの掛け声で一句を成した。言葉に無駄が無く、何よりリズムが良い。季語「夏旺ん」も的確。

文京区長賞 及川真梨子 選

一ノ関降りた瞬間冷ややかに 神奈川県 三輪亮太

【講評】南から来た方が駅を降り肌への冷気を感じたのでしょうか。秋に包まれた地の実感は、東北岩手への実感でもあります。

【日本語部門】

◇選者賞

自由題 高野ムツオ 選

鸚鵡貝の触手うごめく天の川 福島県 大河原真青

【講評】生きてゐる化石鸚鵡貝が餌を捕えようと長い触手を伸ばす。その空の彼方の天の川。億年前と同じ光景が今夜も繰り展げられる。

自由題 岸本尚毅 選

夜の蝉鳴けり電気で動く街 東京都 長根一芳

【講評】種々の電気仕掛で出来ている街に夜の蝉が鳴いている。生物でありながら機械のように精巧に鳴く蝉がふとものがなくも思える。

日本語部門

◆一般の部 自由題

特選

高野ムツオ 選

和賀流の饅頭恋し盆が来る

東京都 鈴木綾子

特選

夏井いつき 選

夜の蝉鳴けり電気で動く街

東京都 長根一芳

特選

岸本尚毅 選

ひんやりと指にはりつく花の塵

盛岡市 吉村翌檜女

◆一般の部 盛岡題

特選

白濱一羊 選

じやじや麵に今日を労ふ寒卯

東京都 遠藤玲奈

特選

名久井清流 選

さんさ踊りピンクアフロのお姉さん

盛岡市 村山あやめ

特選

高野ムツオ 選

雲あつめ雲放ちをりあめんぼう

盛岡市 すずめ豆

特選

夏井いつき 選

榎植熟れそろそろ牛を手放すと

盛岡市 篠村恵美子

特選

岸本尚毅 選

ストーブやうたた寝の間にポトフでき

盛岡市 吉田由紀子

特選

白濱一羊 選

南部桐母の匂いの花咲かす

大船渡市 斎藤陽子

特選

名久井清流 選

啄木忌やりたいことを百個書く

秋田県 いしとせつこ

日本語部門

◆一般の部 自由題
入選

高野ムツオ 選

林檎なら食べられるかと妻へ剥く

大阪府 今井文雄

日と雲を閉じ込めている草の露

新潟県 佐藤靖

震災は背に張り付いて養花天

盛岡市 みつ豆

放課後もひとりで残る雪だるま

宮城県 高橋さん

曼殊沙華うつして湖のぬれみたり

千葉県 千葉信子

夏の星あの頃見ていた夢に似る

奥州市 高橋生楽

ほんたうのさいはひを問ふ星月夜

盛岡市 及川智子

よくくねる方が蚯蚓のしつぼらし

兵庫県 杉岡壺風

テーブルの上にみかんがある平和

奥州市 小野寺流伝

梅雨ってさ金魚みたいね私たち

盛岡市 十月小萩

往診の自転車磨く雪間草

東京都 若林杜紀子

秋の金魚ひらりと街へ行けたなら

宮城県 菊池修市

いつついたとも知らぬ傷啄木忌

滝沢市 三角尚子

暖かや河馬の欠伸に吸はれさう

花巻市 熊の谷のまざる

些事といふ仕事大切葎の花

盛岡市 二階堂光江

蝸牛大海をゆく船のやう

盛岡市 相馬定子

木を登る水音いつか雲の峰

盛岡市 小野睦子

夏空あをし回天を知りてなほ

北海道 村瀬ふみや

海鞘を食う早池峯かつて海だった

盛岡市 夏谷胡桃

日本語部門

◆一般の部 自由題

入選

夏井いつき 選

実印の朱肉へしづむ夜の秋

東京都 曾根新五郎

暖かや河馬の欠伸に吸はれさう

花巻市 熊の谷のまさる

天水をたつぷり島の墓洗ふ

東京都 曾根新五郎

花疲れ永き踏切ありにけり

東京都 和田十目

百枚の落葉拾ふを日課とし

金ヶ崎町 板宮成悦

素揚げする菜の花だけが軽い音

大阪府 岡田諭志

ガーベラを手に伝へたい事がある

新潟県 伊藤一二三

今朝遇ひし狐の話遠野郷

盛岡市 山火律子

浜菊や夕日の海の膨れくる

花巻市 武田稲子

満月を浴びて産婆は臍切りぬ

山形県 須藤結

木洩れ日の下を金魚の墓とせり

久慈市 成田不美

春田回りて胎の子の動き出す

盛岡市 及川永心

廃線の枕木しづむ夏野かな

盛岡市 二階堂光江

片蔭の端に十字を切る球児

東京都 山月恍

鳴くかはづ踏み越えてゆくかはづかな

秋田県 稲畑とりこ

夏空や時報を歌う犬の声

一戸町 天ノ瀧明秋

水音に熟れて大きな通草の実

花巻市 高橋和枝

音のして二階へ上がる遠花火

盛岡市 村山あやめ

皮蛋の粥つやつやと冬日向

千葉県 陽光樹

二つ目の家に帰れば湯冷めかな

神奈川県 久保田巻毛

日本語部門

◆一般の部 自由題

入選

岸本尚毅 選

狩まじなふ槍を獲物の足跡へ

盛岡市 伊藤恵美

駐輪場だけの西口雲雀鳴く

奥州市 鈴木綾乃

氷菓舐む娘の顔を忘るるも

盛岡市 篠村恵美子

虹立つやビールケースの上の歌手

久慈市 佐藤茂之

大き弧を描く卒業の日の渡し

東京都 若林杜紀子

よくくねる方が蚯蚓のしつぼらし

兵庫県 杉岡竜風

川底に川面の影や秋立ちぬ

滝沢市 三角尚子

秋の金魚ひらりと街へ行けたなら

宮城県 菊池修市

鉛色の夫の行李に歎く徂春

東京都 町屋八重子

骨を喰う癌の止まらぬ鴟の贅

奈良県 素々なゆな

我が街の上の空路や蟬時雨

大阪府 岩田真弓

ベンチ前の駆け足行合の空

盛岡市 朔ら望

初雪のウンボに積もる休工日

神奈川県 渡辺一充

箸先の落味噌を舐め日も暮れず

東京都 大橋禪太郎

敗戦忌我は地獄へ行くと父

矢巾町 及川恵子

秋の蝶か細き蕊を扱ひ所

神奈川県 村田朋美

墓洗ふ山に食はるる捨て畑

紫波町 四日市洋子

つまべにや風入れにゆく母の家

盛岡市 澤口航悠

空港の小さき町の盆の月

秋田県 稲畑実可子

雷響くシュレッターへと過去のもの

盛岡市 島山一美

日本語部門

◆一般の部 盛岡題

入選

白濱一羊 選

井戸の水汲むほど澄みて賢治の忌

秋田県

鈴木仁

じゃじゃ麺が先ず食べたいと帰省の子

盛岡市

吉村翌檜女

叱られて味噌ばんかじる炬燵かな

盛岡市

十月小菘

一山の菩提寺に雨花木槿

盛岡市

大原宏司

「可否」を灯してつるべ落としかかな

盛岡市

十月小菘

庭下駄の鼻緒につかれ八月尽

紫波町

高橋キヨ子

軽鬼の子の係日赤総務課に

盛岡市

伊藤恵美

打水や賢治童話の発行所

盛岡市

阿部ゆき子

日盛や老舗喫茶のカレーの香

盛岡市

村上久実子

いしがきを揺らすシャウトや天高し

久慈市

佐藤茂之

百円の牡蠣に行列よ市立つ

盛岡市

兼平玲子

涼しさや公会堂の急階段

奥州市

伊藤さとる

マイジョッキ傾け炎暑の材木町

北上市

小林史枝

啄木の歌碑をめぐけて銀杏散る

奥州市

遠藤カオル

チャグチャグと鈴音先に来て涼し

盛岡市

大信田宏子

開運橋ゆつくり渡る受験の子

東京都

長沢成美

良き風を選んで鳴りぬ鉄風鈴

盛岡市

齋藤雅博

母止まれば子馬かけ寄る馬祭

盛岡市

相馬定子

空蟬や城の石垣普請中

盛岡市

佐藤幸二

啄木の影見失う夜店かな

奥州市

鎌倉道彦

日本語部門

◆一般の部 盛岡題

入選

名久井清流 選

擬宝珠の橋の上なる夕涼み

千葉県 長尾登

賢治派と啄木派みて銀河濃し

盛岡市 村井康典

前九年てふバス停や青葉風

北海道 沼田泥舟

夕焼けにうかぶ昭和や鉈屋町

盛岡市 村田素有

岩手富士映り込むまで田水張る

東京都 羽住博之

秋日和城址へゆるり歩こうか

矢巾町 如月海雲

飛び散る汗破帽打ち振り応援歌

奥州市 主馬

今朝の秋訪うて野の花美術館

宮城県 熊谷房子

秋うららぶちようほまんぢゆう頬張つて

福島県 大河原真青

五月晴乳飲み馬コモお洒落して

久慈市 佐藤香子

マイジョッキ傾け炎暑の材木町

北上市 小林史枝

馬コ待つ中津川原も五月晴

花巻市 三浦耕太郎

良き風を選んで鳴りぬ鉄風鈴

盛岡市 齋藤雅博

チャグチャグ馬こ果てて馬の香残る街

奥州市 伊藤さとる

秋高し姫神山はつんとして

大阪府 岩田真弓

秋麗「でんでんむし」の一日券

紫波町 三縄美和子

輪踊りに何処の何方もおへれんせ

九戸村 高島ふみ女

開運橋ゆつくり渡る受験の子

東京都 長沢成美

跳まはる祭太鼓の白き脛

盛岡市 岩田朝夫

組長のなはん言葉や秋祭

盛岡市 山火律子

日本語部門

◆ジュニアの部

入選

白濱一羊 選

秋めいて恋の行方を海に問う

神奈川県

武藤愛佳

夏の海マナティーにキスされました

東京都

神野純

爪を切る音の響きで知る夜長

盛岡市

武藤大粋

鳳梨やカレーライスに英国旗

愛知県

富田輝

スイカわりめかくししてはみえないな

盛岡市

金子史実

入選

及川真梨子 選

夕暮れの微風を運ぶ青とんぼ

東京都

李左児

サイダーにのどがふるえるかみなりみたい

盛岡市

細井昂

放課後の止まる絵筆や雲の峰

盛岡市

継枝千桜

ひまわりとせくらべをしてまけちゃった

盛岡市

宮野心那

霧ある日赤い林檎が落ちていた

盛岡市

上澤風雅

文京区と盛岡市の絆

歌人、詩人、評論家として知られる石川啄木は、岩手県盛岡市日戸で生誕し、文京区小石川の地においてわずか26歳の若さで亡くなりました。この縁から、2019年2月20日両都市は永続的な交流が図られることを願い、友好都市提携しました。

これまでの交流

▶ 友好都市提携調印式



石川啄木のご親族立会のもと、両市区長や議長など約100名の出席者が集まり、調印式が行われました。

▶ 啄木学級 文の京講座



盛岡市と玉山村の合併（H18.1）を機に、文京区において「文の京講座」を開催し、文京区民をはじめ、首都圏の方々に広く石川啄木の魅力を発信しています。

▶ 盛岡さんさ踊り



文京区民が来盛し、盛岡さんさ踊りに参加したり、「文京さくらまつり」でミスさんが踊りを披露するなど、地域文化を通じた交流を行っています。

▶ 俳句交流会



友好都市提携5周年を記念し、文京区と盛岡市の中学生が盛岡のまちを歩き、俳句作りを通して交流を行いました。

【英語部門】

Judges: / Michael Dylan Welch, Kimura Toshio
Japanese Translation: / Kimura Toshio
選者 / マイケル・ディラン・ウェルチ、木村聡雄
邦訳 / 木村聡雄

【Grand Prize】 ビクトリア市長賞

マイケル・ディラン・ウェルチ選

Mircea Moldovan ルーマニア

a suitcase
on the nursing home steps
autumn chill

スーツケース
老人ホームの石段に
秋涼し

This poem trusts the image to evoke feeling. That suitcase on the steps, does it mean coming or going? What has happened? The chill of autumn suggests that the story is not a happy one, implying that someone is being moved into the home to live their last days, or perhaps that they've passed away, and now their belongings are being taken away. For a moment, one suitcase is left on the steps, as if to say goodbye. Patricia Donegan, a haiku poet who died in 2023, once said that "Every haiku is a piece of a story. It is not a whole story, but a hint of a story that the reader completes in his or her own mind." We have the opportunity to complete the sad story in this poem.

—Michael Dylan Welch

この句は感覚が浮かんでくる情景を描いています。石段に置かれたスーツケースはここに来たのか、それとも出て行くのでしょうか。何が起きたのでしょうか。秋の冷え込みはその物語が明るいものではないと暗示しています。最期の日々をここで過ごすためにだれか越してきたのか、あるいは亡くなっているかその荷物が引き払われるところかもしれません。あたかも別れを告げるかのごとく、わずかな間スーツケースは石段に留まっています。2023年に亡くなった俳人パトリシア・ドネガンはかつてこう語りました。「どの俳句も物語の一部です。それ自体で完全なわけではなく、読者が心の中で完成させるべき物語のヒントなのです。」私たち読者は、この句を読んで悲しい物語を完結させる機会を得たと言えるでしょう。

—マイケル・ディラン・ウェルチ

Danny Blackwell スペイン

hailstones
the basilica
busier than usual

霰降る
教会堂の
賑やかさ

“Basilica” is an uncommon word in haiku, but here it works well with its alliteration with “busier,” emphasizing both words. This poem suggests a decline in religious service attendance, but at least the hailstones (sent from God?) are doing their part to help. Or it could be that the hailstorm is not causing people to enter the basilica. Rather, attendance has increased for some other reason, and this is fortunate for those people who have escaped the wrath of hailstones.

「教会堂 (Basilica)」は俳句によく出てくる言葉ですが、ここでは「より賑やか」(busier)とともにも頭韻が用いられ両方の語が強調されています。この句は礼拝への出席者が減っている現状も暗示しているでしょう。ただ少なくとも霰が（神から送られてきたのものでしょうか？）その救いの役目を果たしています。いやもしかしたら、霰が人々を教会堂に導いたのではないのかもしれませんが。むしろ何か別の理由で出席者が増えたのかもしれませんが。いずれにせよ、ひどい霰から逃れようとする人々にとっては幸運な結果となったことでしょう。

Stefanie Bucifal ドイツ

spring morning
a hint of lilac
in the old man's tune

春の朝
リラ 香る
老人の歌

The lilacs tell us it's spring, a season of beginning, and the morning marks a beginning too. This contrasts with the man's age, but surely his tune is jaunty and optimistic, reveling in perpetual beginnings as a life choice. The synesthesia of a tune having the smell of lilacs also comes as a fresh surprise.

リラは春を告げます。春は始まりの季節で、朝もまた始まりを表します。これは登場人物の老齢と対照的です。とはいえ、その歌声は軽やかで楽天的で、いつまでも始まりの感覚を選んで楽しんでいるようです。リラの香りの歌声というふたつの感覚も驚くほど新鮮に感じられます。

Lakshmi Iyer インド

new moon

an oyster cuddles

the nautical light

新月に

牡蠣が抱き寄せる

航海灯

We do not usually see the new moon. It should be a moonless night. What do oysters in the dark sea rely on instead of moonlight? This haiku makes readers feel that the description might be true.

新月は普通われわれには見えないので、月のない夜でしょう。そんな暗い海で牡蠣が月明かりに代わって頼りにするものは何なのか、読者になるほどと思わせる一句でしょう。

Meagan Bussert アメリカ合衆国

warbler's nest

a bus ticket tucked

within

鶯の巣

バス・チケットが

その奥に

The call of the warblers is a reminder of the arrival of spring. Their nests are made of leaves and twigs. When you quietly looked into their nests during birdwatching, what you found there was.... Was it someone's lost ticket?

春の訪れを感じさせてくれるのが鶯の声です。その巣は小枝や茎などで作られています。バードウォッチングのときそっと中を覗くとそこに見つけたものは…。誰かの落とし物でしょうか。

Sebastian Chrobak ポーランド

her old diary

open closed open

butterfly's wings

彼女の古い日記

開き閉じ開き

蝶の羽

The old diary would be full of memories. When she opens it and sweet and sour memories come flooding back, she may close it instinctively. A butterfly with open and closed wings also appears to overlap with her.

古い日記帳には彼女の思いが詰まっていることでしょう。開いて甘酸っぱい記憶が蘇ってくると、思わず閉じてしまうかもしれません。羽を開いては閉じる蝶も彼女と重なって見えます。

【Honourable Mentions】 入選

マイケル・ディラン・ウェルチ 選

—Michael Dylan Welch

Boris Nazansky クロアチア

an empty swing
first cherry petals
come and go

無人のブランコ
初桜の花びら
行ったり来たり

Baisali Chatterjee Dutt インド

dusk
a swing slows to a stop
in the empty park

夕暮れは
ゆっくりとブランコ止まる
空っぽの公園

Scott Mason アメリカ合衆国

surf's up
a little boy tries
to move his castle

波が立つ
少年
城を移したくて

Stephen Toft イギリス

mating eagles
skywriting the end
of winter

鷲つるみ
空中に文字
冬終わる

Sebastian Chrobak ポーランド

Hiroshima Day
still not enough
paper cranes

広島平和記念日
未だ足りない
折り鶴

Joshua Gage アメリカ合衆国

fingerprints
on the carousel horse...
dusty sunbeams

指紋の跡
回転木馬に...
埃舞う日差し

Shravani Rao Vydula アメリカ合衆国

blade of grass

snail's delicate crawl

balancing the universe

草の葉に

蝸牛そろり

天と釣合う

Agnes Eva Savich アメリカ合衆国

tea ceremony

the forest

at my fingertips

茶の湯すなわち

わが指先の

森か

Satyanarayana Chittaluri インド

a crow

cawing and cawing

what did she lose?

鴉一羽

カアカア

何を失くしたの

Claire Vogel Camargo アメリカ合衆国

children's laughter

the choreography

of snowflakes

子どもたちにつこり

雪ひとひらの

振付

Sebastian Chrobak ポーランド

whispering secrets

a squirrel hides an acorn

that no one will find

秘密じゃない

栗鼠の隠す団栗

もう分からない

Jenny Fraser ニュージーランド

in and out

of the vastness

a blackbird calls

空間の

内そして外

クロウタドリの歌

第五回盛岡国際俳句大会 投句規定

投句募集期間 令和五年五月二十二日～八月三十一日

◆日本語部門

【一般の部 自由題（自由題材の四季の句）】

選者 高野ムツオ（「小熊座」主宰）

夏井いつき（俳句集団「いつき組」組長）

岸本尚毅（「天為」「秀」同人）

賞 大会賞一作品、選者賞二作品、特選六作品、

入選六十作品

【一般の部 盛岡題（盛岡にちなんだ四季の句）】

選者 白濱一羊（「樹氷」主宰）

名久井清流（「草笛」代表）

賞 大会賞一作品、盛岡市長賞一作品、

特選四作品、入選四十作品

【ジュニアの部】

選者 白濱一羊（「樹氷」主宰）

及川真梨子（「小熊座」編集長）

賞 大会賞一作品、文京区長賞一作品、入選十作品

◆英語部門

選者 マイケル・ディラン・ウェルチ（俳人）

木村聡雄（俳人 国際俳句協会事務局長）

賞 大会賞一作品、特選五作品、入選十二作品

※ 作品の漢字は原則として新字体で記載しています。

主催 盛岡国際俳句大会実行委員会
共催 盛岡市IBC岩手放送
後援 岩手県 盛岡市教育委員会 公益財団法人盛岡市文化振興事業団
公益財団法人盛岡国際交流協会 一般社団法人現代俳句協会
公益社団法人俳人協会 国際俳句協会 公益社団法人日本伝統俳句協会
俳句ユネスコ無形文化遺産登録推進協議会
岩手日報社 盛岡タイムス社 NHK盛岡放送局 テレビ岩手
岩手めんこいテレビ 岩手朝日テレビ エフエム岩手 岩手ケーブルテレビジョン

盛岡市のシンボル(市の花・市の木・市の鳥)



盛岡市の花『カキツバタ』

さわやかな初夏(6月中旬頃)に紫色の花を咲かせます。古くから市内の各地に自生しており、山岸に群生しているカキツバタは、県の天然記念物に指定されています。アヤメ科。多年草。



盛岡市の木『カツラ』

山地に自生する落葉樹で、高さ30メートル近い大木となります。枝が垂れる「シダレカツラ」はこの地方特有の変種で、肴町と大ヶ生の瀧源寺、門のシダレカツラは国の天然記念物に指定されています。カツラ科。



盛岡市の鳥『セキレイ』

市街地を流れる中津川周辺などでよく見られる濃淡のコントラストが美しい鳥です。オスとメスの仲がよく水をたたくように尾を上下させて飛ぶ姿は、とてもスマートです。セキレイ科。
